

## 研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-139	24-097	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
<b>題名 (原題/訳)</b>		
Daily alcohol intake and its negative association with constipation based on NHANES data 2005-2010 NHANES 2005-2010 データに基づく日常的アルコール摂取量と便秘との負の関連		
<b>執筆者</b>		
Chen WX, Peng XF, Yu M, Wang DC.		
<b>掲載誌</b>		
Sci Rep. 2025 Mar 23;15(1):10021. doi: 10.1038/s41598-025-91899-9.		
<b>キーワード</b>	<b>PMID</b>	
アルコール摂取、便秘、NHANES、疫学、食習慣	40122926	
<b>要 旨</b>		
<p><b>背景:</b> 便秘は一般的な消化器疾患であり、多くの患者に身体的および心理的苦痛をもたらし、日常生活や生活の質に大きく影響を与える。アルコール摂取と便秘との関連は、大規模集団研究では十分に検討されていない。本研究の目的は、2005～2010年の米国国民健康栄養調査 (NHANES) のデータを用いて、20歳以上の成人における日常的なアルコール摂取量と便秘との関連を検討することである。</p>		
<p><b>方法:</b> 本研究では24時間食事思い出し調査による2日間の平均飲酒量を算出し、非飲酒 (Q1); 0g、少量飲酒 (Q2); 0.1～10g、中等量飲酒 (Q3); 10.1～20g、多量飲酒 (Q4); 20.1～40g、超多量飲酒 (Q5); 40g 超の5群に分類して解析した。アルコール摂取量と便秘との関連は加重ロジスティック回帰モデルを用い、潜在的交絡因子を調整した上でオッズ比 (OR) と95%信頼区間 (CI) を算出した。さらにアルコール摂取量と便秘との非線形パターンを探索するために制限付き三次スプライン (RCS) 解析を行い、集団群間での効果の差を評価するためのサブグループ解析および交互作用の検討を行った。</p>		
<p><b>結果:</b> 解析対象は14,465人 (女性50.9%、平均年齢49.4±18.0歳) であり、交絡因子を調整した結果、アルコール摂取量と便秘との間に有意な逆相関が認められた。Q1と比較して、Q2-Q5の飲酒群で便秘リスクが段階的に低下し、Q5群ではOR = 0.24 (95%CI: 0.11-0.52, P &lt; 0.001) であり、傾向検定も有意であった (P = 0.001)。RCS解析では、アルコール摂取量と便秘と非線形の逆相関が認められた (P = 0.016)。サブグループ解析では交互作用は認められなかった (全ての P &gt; 0.05)。</p>		
<p><b>結論:</b> 日常的なアルコール摂取量と便秘との間に有意な逆相関があることが示された。今後は、前向きコホート研究など、より厳密な研究デザインを用いて、アルコール摂取と腸の健康との関連を確認し、その基礎となる生物学的メカニズムを解明することで、アルコール摂取の潜在的な利益とリスクを評価する必要がある。</p>		